

言葉の迷信と場面の考慮

——「ご苦労さま」の用法をめぐる——

梅林 博人

一、はじめに

いわゆる言葉の迷信について、かつて小池清治（一九九四）は、次に引用するような昭和二〇年代から続く「全然」の事例を紹介した上で、「事実を無視して、『絶対的正しさ』を主張するときに『迷信』が生まれる。」（一一ページ）と教示した。

言葉についての「迷信」は少なくない。

「全然」は打消し表現と呼応した形でしか用いない。今の若者は「全然、暇だ。」などと言って日本語を濫^{みだ}している。嘆かわしいかぎりである。

右の意見は「日本語の濫^{みだ}れ」が話題になると必ず言及される「迷信」である。（八ページ）

『「迷信」は少なくない』という小池氏の発言は的確で、実際それを裏付けるように、平成の時代になると、ビジネス本やインターネットのサイト、日本語教育関連書籍などで『「ご苦労さま」は目下から目上には使えない』といった内容の迷信（誤解）がはびこり始めた。

①「ただいまあ」と帰社した上司や先輩に「お帰りなさい。ご苦労様でした。」

×「ご苦労様」は上位職（目上の人）が下位職（目下の人）にかける言葉です。逆方向はNG。（志田唯史（二〇〇六）一四八ページ）

②「〇お疲れ様です」「×ご苦労様です」（目上の人に

使つては怒られますよ)

(Discover Japan 特別編集 (二〇一三) の表紙)

- ③ 日本語表現・2021.08.15 「ご苦労様です」は目上に失礼? 正しい意味と敬語としての使い方 (<https://biz.trans-suite.jp/4756> 最終閲覧日二〇二二年一月二〇日)

- ④ ([Question90 授業のあと、先生に『ご苦労さまでした』と言うのは失礼だそうです、なぜですか』という問いの応え) 『ご苦労さまでした』という表現は、相手の労をねぎらうための表現だということです。つまり、「ねぎらう」ということは、下の者が上の者に対して何か労力を提供した時、それに対して上の者が使える言葉なのですから、教師と学生という関係では不適当ということになります。(酒入郁子、他 (一九九一) 二七六ページ。傍線は引用者)¹⁾

この『ご苦労さま』は目下から目上には使えない『という迷信については、すでに飯間浩明 (二〇〇三) や倉持益子 (二〇一一) に、根拠薄弱との指摘がある。し

かしながら、インターネット上では相変わらずその種の話題が散見されることから、今日、迷信の沈静化が進んでいるとは考え難いものがある。²⁾

「ご苦労さま」の迷信は、インターネットという情報網を背負っている点で、昭和から続く「全然」の迷信とは事情が異なっている。以下で確認するような、語学研究者が発する専門的な情報 (語史的事実、使用の条件など) も、最近では入手がしやすくなっていて、興味関心さえあれば専門家以外のもでも確認ができる。その状況を考えると、平成の一時代を越えてなお、それが話題性を保っているということは、一種奇妙なことではないだろうか。

そこで小稿では、この「ご苦労さま」の迷信が浮遊し続ける背景にはどのような事情 (理由) があるのかを考え、結論として、受益の様相を判断する煩わしさと、そこから来る用法の単純化への指向がその背景には潜んでいることを述べる。

二、先行研究の内容

まず、先行研究の内容を確認しておきたい。

「ご苦労さま」については、従来諸言及があるが、先述した《「ご苦労さま」は目下から目上には使えない》という言葉説に誤解があることを理解するためには、使い分けの条件、語史を含む使用実態、迷信発生の仮説、国語辞典の注記の状況、などを指摘する論考に注目することが有効であろう。そこで、小稿では、岡本真一郎・多門靖容（一九九六）、飯間浩明（二〇〇三）、倉持益子（二〇一一）、を参照することとし、ここでは、それぞれの要点を示すことにする（引用中の傍線は引用者による）。カンマがある場合は読点に改めた。半角数字は各論考での例文番号である。以下、引用すべてにわたって同様）。

二一、岡本真一郎・多門靖容（一九九六）

岡本・多門論考は、『ごくろうさま』の使い分けに、話し手の指示権限、受益者、負担量の3つの要因が大きく影響することを、調査に基づいて論じ」（一〇六ページ）、以下のように述べている。

○「話し手が受益者に含まれる場合、『ごくろうさま』は、話し手の指示権限が強ければどの場面でも用いられる。話し手の指示権限が弱いと、話し手・聞き手以外の受益者が多いほうが自然さが増す傾向にあ

る。」（一〇一ページ）。

○「聞き手受益状況では指示権限が強ければ（310）不自然とされる。一方指示権限が弱い場合（320）は、屋根修理の場面では不自然さがやや和らいだ。」（二〇一ページ）。

詳細は同論考を参照されたいが、この記述からだけでも、「ご苦労さま」が複数の場面で使われることが分かる。同論文によれば、「話し手の指示権限が弱い」のは通常目下の者であるから、傍線部分は目下から目上への「ご苦労さま」のことで、例文としては、

⑤ 223a 上司が環境保護のボランティア活動に参加する。〔部下↓上司〕（二〇〇ページ）。

⑥ 223b 外務大臣が訪中から帰国する。〔記者↓外相〕（二〇二ページ。可否には個人で「判断にばらつき」があると一〇四ページで付言がある）。

などがあげられている（丸付き数字⑤⑥は引用者がここで付けた）。

二二、飯間浩明（二〇〇三）

次に飯間論考であるが、そこでは次のような内容が述べられている。

○江戸時代の浄瑠璃、歌舞伎のたぐいの調査では、身分の上の者が下の者の労をねぎらうような例はなく、「かえって、目下の者が目上の者に使っている例が目につく。それゆえ、「上から下へ使うのが本来」といったような説明は、根拠が危うい（七三～七四ページ。「仮名手本忠臣蔵」の二例を掲示）。

○中田祝夫氏の説（『言語生活』一九六五年二月号）を踏まえると、「ご苦労さま」を目上から目下を使う場合でも差しさわりが出ることもあると思われる（七五～七六ページ）。

○『『ご苦労さま』には当然の職務を果たしている人をねぎらう感じがある』とすると、「上役が部下とは直接関係のない公的な仕事、たとえば、たまたま何かの裁判の証人になって裁判所に通っているようなとき、部下は上役を『ご苦労さまでございます』とねぎらうこともできるのではないのでしょうか」（七五～七六ページ）。

○「世代や、地域によっても相違がある」が「陸上自衛隊では、部内の電話連絡などでよく『ご苦労さまです』というあいさつが使われ」、「上官に対しても

そのように言ってねぎらう人もい」る（七六～七七ページ）。

○国語辞典で「目上には使わない」といった注記のあるものとして七冊、注記のないものとして五冊をあげる（七七～七八ページ）。

国語辞典については、注記のあるものとなないものをそれぞれ複数あげること、「目上には使わない」という説明が、国語辞典の解釈として必ずしも主流ではないことを飯間氏が暗示していると思われる。

二一三、倉持益子（二〇一一）

倉持論考では、いくつかの調査によって以下の内容が述べられている。

○インターネット、雑誌、新聞等のメディアにおける事例や辞書の記載や生活上耳にした実例を収集し、「現在における目上や敬意対象者への使用例」として、「例1 弟子から師匠へ／例2 後輩から先輩へ／例3 新聞の見だし／例4 商店街のアナウンス／例5 集会のあいさつ」をあげる。そして、「日常生活の中では、集会の挨拶をはじめ、目上等敬語で遇すべき存在にそれを使ってもおかしくない場面は

たしかにある。」と述べる（一五～一六ページ）。

○江戸期の通俗本から得た用例の「使用対象を見ると、20例が敬意を表すべき相手。3例が友人、2例が、使用人等仕事を行った者であった。このように使用例の多くが敬意を示すべき人に使われている。」と述べる（一七ページ。実例二例をあげている）。

○『青空文庫』で一八六八～一九五九年の文学作品を調査し、「大正期頃、目上への使用例数と目下（部下）への使用例数が逆転し、その後、時代を経るに従いその差が開き続けている。」と述べる（一九～二〇ページ）。

○『青空文庫』の調査から、「実際の軍隊での労い言葉『御苦労』が、徴兵男子を通じて国内に広まり、さらにそれが時代小説で多用されたことが、『もともと主君からの労いの言葉』という誤解の原因になったのではないか。」と推察する（二〇ページ）。

このほか、飯間論考などを踏まえて、国語辞典での扱いも記している。

二四、先行研究から分かること

以上を総じてみると、「ご苦労さま」の語誌の概要が

分かる。また、小稿が付した傍線部から、現代日本語においても目下から目上に「ご苦労さま」を使うことがあるということが分かり、その見解は三者に共通していることが分かる。

三、『敬語の指針』で書かれていること

次に、『敬語の指針』（文化審議会答申）の全文を見る。これは、今見た先行研究の共通見解とは異なり、冒頭のビジネス本同様、「ご苦労さま」は目下から目上には使わないと記している。あえて全文を引用するのは、従来あまり引用されることがなく、そのためであろうか、そこに何が書かれていて、そして何が書かれていないのかが確実に了解されていないのではないかと疑われる節があるためである。

【27】時間外に仕事を教えてくれた上司に「どうも御苦労様でした。」と言ったら、「御苦労様はないだろう。」と笑われてしまった。それで、書類作成に追われた上司が帰る時には「御苦労様」以外の言い方を考えてみたのだが、適切な表現が浮かばず、そ

のままになってしまった。そういう気持ちを表した場合には、どうすれば良いのだろうか。

【解説1】仕事について教えてくれた上司に対しては、「どうもありがとうございます。（大変助かりました。）」と感謝の表現にすれば良い。また、書類作成に追われた上司に対しては、「（本当に）お疲れ様でございました。」などと言えば良いだろう。

【解説2】「御苦勞様」は、基本的には、自分側のために仕事をしてくれた人、例えば、配達をしてくれた店員などに対して、「ねぎらい」の気持ちを込めて用いる表現である。（なお、このような場合に「お疲れ様」と言うのは不自然である。）ねぎらいは、上位者から下位者に向けたものとなるため、目上の人に対しては、「御苦勞様（でした）」を用いない方が良い。

これに対し、「お疲れ様」は、「ねぎらい」の気持ちを込めて使われる表現ではあるが、一緒に仕事をした後など、お互いに声を掛け合うような場合にも多く用いる表現である。（なお、このような場合に「御苦勞様」と言うのは不自然である。）そのような状況であれば、「お疲れ様」ではなく「お疲れ様で

ございました」などを用いるというような丁寧な言い方であれば、だれに対しても使える表現である。したがって、仕事上の上司であつても使うことができる。

要するに、時間外に仕事を教えてくれた上司に対しては、「御苦勞様でした」というねぎらいの言葉ではなく、「ありがとうございます」と感謝の気持ちを表す言い方に変えた方が良く、一緒に書類作成に追われていた上司に対しては、「お疲れ様でございました」と、気持ちを込めて表現すれば良いわけである。

ただし、このような定型的な表現ではなく、例えば「おかげ様で仕事が少し分かるようになってきました。」などと、別の観点に立った表現を使うことで、上手に自分の気持ちを相手に伝えることも可能である。（四五～四六ページ）

この引用部分で了解しておくべきことは、厳密な場面設定がなされているという点である。すなわち、時間外に上司が部下に仕事を教えるというビジネスシーンが示されており、そのもとで、「目上の人に対しては、「御苦

労様（でした）」を用いない方が良い」として、傍線部分を要点として述べている。

つまりこの文章には、個人の立場で行われた私益の授受のことだけが書かれており、公務公益あるいはそれに準ずるような場面での言葉づかいのことはまったく書かれていない。「上司」とのやり取りではあっても、「時間外」の設定であるから公務公益性が低いことは明らかである。

したがって、ここには、現代日本語の「ご苦労さま」の一用法しか書かれていないということになる。この点は十分に理解しておくことが肝要である。

四、国語辞典の記述

最後に国語辞典の記述を見る。

ごくろう **【御苦労】**〔名・形動〕②相手の骨折りをねぎらっている語。目上の人には使わないのが普通。「―、―。もう君はかえってよろしい」（『大辞林』初版 一九八八年）

ごくろう **【御苦労】**《口頭》③〔感〕（単独、あるいは「―さま」のような形で）ねぎらっているあいさつに、また、ひやかしに用いる語。「どうも―さん」
▽本来は同等以下の者に対して使う。（『集英社国語辞典』初版 一九九三年）

ごくろう **【御苦労】**〔名ナノ〕他人の苦労を敬って言う語。他人のほねおりをねぎらう言葉。「―さま」
▽ふつう目上の人に対しては使わない。（『岩波国語辞典』第六版二〇〇〇年。第五版一九九四年にはその種の記述は無し）

一見すると冒頭のビジネス本と同内容であるかのように見えるが、注意深く見てみると、そこには、「ふつう目上の人に対しては使わない。」と、特に「ふつう」と記されているものと、そうでないものがある。

国語辞典は紙幅の制限が厳しいので、「ふつう使わない」が単純な意味であるとは考え難く、そこには含みがあると思われる。そう考えると、これは、「ふつうは使わないが、使う場合もある」と解釈すべきなのではないだろうか。そうだとすると、目下から目上への用法も伝

えていることになる。つまり、先行研究を踏まえた記述であると考えられ、ビジネス本と同一視すべきではないとも言える。

しかし、そのような斟酌が一般にどの程度行われているであろうか。辞典の使用者にそこまでを望むのは酷であろうから、紙幅との兼ね合いはあっても、わかりやすい記述への改善が望まれることになる。また、「ふつう」を添えない記述もあることを考えると、現時点では、国語辞典も「ご苦労さま」の迷信の片棒を担いでいると見ざるを得ない。

五、迷信の背景

五―一、情報の集約

では、これまでに参照してきた言及を踏まえて、冒頭に示した《「ご苦労さま」は目下から目上には使えない》という迷信が浮遊し続ける背景を考える。それに際し、参照してきた情報を、内省も加味して私に以下（１）（３）のように集約する。

（１）現代日本語において「ご苦労さま」は、【A、提供された労役と恩恵を踏まえて目下が目上に用いる】こ

とも可能であるし、また、【B、提供された労役と恩恵を踏まえて目下が目上に用いる】ことも可能である。後者の用法Bは、労役と恩恵が私事私益的なものではなく、公務公益的なもの、ないしはそれに準ずるものであるときに現れやすい。使用場面の例は小稿二―で先述した⑤⑥である。目下から目上に使う例は、倉持氏が「たしかにある」というように、少し注意をしていると日常で見聞できる。最近筆者が見つけた用例⑦を補足しておく。

⑦田所博士「ついさつき海保から届いたデータを見て
もこれは明らかだ。関東沈没は最小限の被害で
終息した」

天海「ほんとうですか？」（天海は厚生労働省官僚）
博士「ああ。現段階では、それ以外の答えが導き出
せない」

天海「すぐに総理にも報告してあげてください。博
士、ご苦労さまでした」

（TBSドラマ『日本沈没』第五話。二〇二一年
一月一四日放送。一官僚が地質学者に述べている
が、立場も年齢も官僚が下である。）

なお、この用法Bを私事私益的な場合に用いると違和

感が生じる。それが『敬語の指針』の場面で、時間外に仕事を教えてもらった部下が、その私事私益を踏まえて、上司に「ご苦労さまでした」といえば不快が生じるというものである。したがって、用法Bでは発話場面についての考慮が必要となってくる。

(2) 従来、「ご苦労さま」の使用の可否は、話し手・聞き手の立場(目上・目下)を基準に判定されがちであったが、もう一つの基準として、労役の内容(私事私益のか公務公益的か)も重視すべきである。この考え方はすでに、Mizutani, O. & Mizutani, N. (一九七七)で指摘されている(However, it can be used regardless of the listener's status if it is used impersonally)。岡本・多門論考での「受益の状況」の観察や、飯間論考の「上役が部下とは直接関係のない公的な仕事」に在るとき、などが同趣旨と目される。

(3) 『敬語の指針』の「目上の人に対しては、「御苦労様(でした)」を用いない方が良い」という指摘はビジネス上の一場面のものではあって、「ご苦労さま」の用法の全体を語っているわけではない。つまり、用法Bまでを網羅してはいない。したがって、これは『ご苦労さま』は目下から目上には使えない』という迷信の後ろ盾

にはならない。

五―二、迷信を支える背景

こうした(1)―(3)の情報が適切に普及していれば、迷信は沈静化に向かうと思われるのであるが、現実にはそうなっていない。

その理由は、この迷信が特にビジネスシーンで重宝されているという点にあると思われる。

岡本・多門論考が指摘するように、「ご苦労さま」の使用には、話し手の指示権限、受益者、負担量の三つの要因が大きく影響するが、目下から目上への使用では、右の(1)で示したように、労役と恩恵が公務公益的なものか私事私益的なものかという受益の様相を考えねばならない。それだけ発話場面の考慮に神経を使うことが求められてくるため、それがまず単純に煩わしくて負担であるという事情が考えられよう。

また、十分に場面の考慮をして用法の選択をしたとしても、その判断には「世代差」「性差」「個人差」があつて、「使用された側はこれを誤用であるとか不快であると感じる、というトラブルも生じやすい」という性質がこの用法Bにはあることを、岡本・多門論考は指摘してい

る（一〇四ページ「3-2-5 判断の分散の場面差」）。つまり、せっかく場面の考慮をしても、その甲斐がないということも多分にあり、その場合にはトラブルも生じかない。

そうなってくると、ビジネスでは目下から目上への用法それ自体を消去してしまう方が運用的には簡便で、かつ、トラブル回避の面からも得策となる。このような発想になったのではないだろうか。

以上の結果から、ビジネス本などには、『「ご苦労さま」は目下から目上には使えない』と用法の一部を削除した言説が登場することになり、そしてそれが一般に敷衍し迷信として重宝され続けている。

端的に言うならば、受益の様相を考慮する煩わしさと、そこから来る用法の単純化への指向である。冒頭に記した迷信が浮遊し続ける背景には、このような事情があるのではないだろうか。

六、おわりに

かつて、企業戦士を象徴する言葉として「二四時間戦えますか」という流行語があった。が、その後、それを

打ち消すかのように、「ワークライフバランス」という言葉が使われ始めてきている。この状況からも明らかのように、私たちは、日常生活をビジネス中心に見ることは減ってきている。それにもかかわらず、「ご苦労さま」の世界では相変わらずで、ビジネス上のルールを一般化しようとする傾向がある。

また、「ご苦労さま」に関するサイトを見ると、「ねぎらい」という語を併せて見ることができるが、「ねぎらい」は場面の考慮が不可欠である。しかるに、「ご苦労さま」の世界では、その場面の考慮については省力化を図っている。いずれも不思議なことである。

そして、場面の考慮を煩わしく思っ、その省力化を進めると、また、新たな迷信がうごめき始める。目下から目上への言葉は「ご苦労さま」ではなく「お疲れさま」というルールがはびこる現在だが、その「お疲れさま」の用法にも、下から上は良いだの悪いだのと声高な意見があることを今回インターネット上で散見した。やはり、言葉の迷信は少なくない。

【注】

- (1) 酒入郁子、他(一九九一)は、Mizutani, O. & Mizutani, N. (一九七七)を参照していると思われるが、そこには、この教室事例に続けて、非個人的な場合には聞き手の立場に関わらず「ご苦労さま」が使われるという内容が、「ニュースキャスター↓総理大臣」の用例などとともに書かれている (However, it can be used regardless of the listener's status if it is used impersonally.)。したがって日本語教育でも目下から目上への用法が考慮される場合もあるようである。酒入論考の記述も、Q & Aの形に収めるための結果とも取れるが、やや誤解を招くまとめ方であると思われる。たとえば、現在話題のアニメ『鬼滅の刃』に関する話題で、「鬼殺隊の隊員が煉獄さんに向かって『ご苦労様でした』とかないわー『お疲れ様でした』だよね」(<http://2ch.nmks.net/11037896>)と話題にされている (最終閲覧日二〇二二年一月二〇日)。
- (2)

【参考文献】

- 飯間浩明(二〇〇三)『遊ぶ日本語 不思議な日本語』岩波アクティブ新書 七三〇七八ページ
- 岡本真一郎・多門靖容(一九九六)「ごくろうさま」の使用の状況的規定因『日本語教育』九一号 日本語教育学会
- 北原保雄編著(二〇〇五)『続弾!問題な日本語』大修館書店 一六〇〜一六二ページ
- 倉持益子(二〇一一)「御苦労」系労い言葉の変遷『明海日本語』第一六号 明海大学日本語学会
- 小池清治(一九九四)『日本語はどんな言語か』ちくま新書
- 郡千寿子(二〇〇八)「文化審議会の答申と敬語教育」『弘前大学教育学部紀要』第九九号
- 国立国語研究所(二〇〇四)『新「ことば」シリーズ 17 言葉の『正しさ』とは何か』
- 酒入郁子、他(一九九一)『外国人が日本語教師によくする100の質問』バベルプレス 二七六〜二七七ページ
- 志田唯史(二〇〇六)『その敬語、ヘンですよ!』アイク出版

中山緑朗、他（二〇〇九）『みんなの日本語事典』明治書院

文化審議会答申（二〇〇七）『敬語の指針』（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf）

文化庁（一九九六）『新「ことば」シリーズ4 言葉に関する問答集―敬語編（2）―』

Discover Japan 特別編集（二〇一三）『正しい日本語の使い方』榎出版社

Mizutani, O. & Mizutani, N.（一九七七）『nihongo notes 1』Japan Times (pp.116-117)

（本学教授）